

皆さん こんにちは。昨年まで新宿剣道連盟でお世話になっておりました樋渡です。
2023年11月より、南米チリで海外協力隊 JICA の派遣で剣道指導をしています。2025年10月までの予定です。先般亡くなられた松村先生より JICA のすばらしさを伺い、私も剣道を通して国際貢献したいと思い今に至っております。

この度、7月4日~7日までイタリアのミラノ市で開催された第19回剣道世界大会にチリの代表監督で参加させていただくことになり、ミラノで恩師真砂先生と再会を果たしました。

JICA の派遣が決まってから、海外で剣道する上で剣道の知識を整理するためにも『社会体育指導員(初級)』の資格を取得したり、各種指導書を読んだりと準備をしておりましたが、一つの大きな目的でもありましたこの世界大会に監督として参加できたことはこの上もない良い経験となりました。

世界大会の目的が、剣道を世界に正しく伝えることであること、正に今私がチリで毎日指導するうえでの目的であります。世界での剣道普及は進み、チリは、剣道人口約300名、その内20名以上が、日本の武道大学を卒業しております。日本で学び自国に帰り、IT時代ですのでたくさんの情報が手軽に入手できる環境の中で、チリの剣道家も日夜剣道の知識を学んでおります。

この度、チリ剣道連盟より総監督の依頼を受け、今回のイタリア派遣になりました。準備期間は僅か6か月。選手選考。技量だけでなく人となりを知ること。スペイン語もままならぬ中、どうしようと毎日剣道手帳に稽古内容や悩み事を記載しながら準備をしてきました。『正しい剣道で勝負に望む』と方針を決め、世界大会で恥ずかしくない剣道をしようと①正しい礼法と着装②有効打突の理解③打突の機会の理解を短期間でどこまで出来るかを考えました。特に礼法・着装については、やり直しの連続。袴・垂の付け方(前下がり)、面ひもの結び方(横結び)など、理由を一つ一つ説明しながら徹底していきました。

②③は、講習会を開きながら何度も実技手本を見せながら実施しました。

日本でもそうですが、学ぶ側の人間がいかに素直に指導を受け入れ自分の物にするかは、国籍は関係ありません。指導者の熱意と、学ぶ側の素直な気持ちが成果や進捗に大きくかかわってきます。その点私自身の指導力の評価は80点ぐらいかと思います。

1970年に始まったこの大会も、剣道世界選手権も、今回第19回を迎え46の国と地域からの参加になり、コロナ禍で1回中止され6年ぶりの開催となりました。

今回は、コロナ禍における暫定的審判法が適用され、特に今までも課題となっていた鏝迫り合いによる試合運びの改善が、各国の事前の習得事項となりました。

試合が始まってみると、各国とも良くコロナ禍における暫定的審判法を学び改善がみられ

ていたように思います。まだまだ力任せのラフプレーは少し見られたものの、お互いの攻め合いの多い内容だったと思います。特に欧州各国の剣道のレベルアップは今まで以上に顕著だったように思います。

上位常連の4カ国は、世代交代が進み、今後も目が離せない試合運びをしていました。

さて、我がチリチームは、女子個人戦でベスト 16、男子個人戦でベスト 32 と予選リーグを一人ずつ勝ち抜くことが出来ましたが、団体戦では男女とも強豪国にコテンパンに叩かれ次回への課題となりました。日ごろの稽古量もさることながら、練習試合不足による『試合への心構え不足』も大きく浮き彫りになりました。足捌きを中心とした「基本稽古」と打突の機会を自ら創造し見つけて打つ「掛かり稽古」が今後に向けての課題として捉えました。そのためには、私が各道場の中堅指導者を育成し、全体の底上げをしていく重要性を再認識しました。次回の国際大会は、2025年11月の南米大会(アルゼンチン開催)。第20回世界大会は2027年(日本開催)が予定されています。

今後の通常稽古においては、正しい剣道を身に着けるべく指導を続けて行けていきます。特にこの1年で7段1名、6段2名、5段4名、4段10名と中堅指導者も育ってきており、『理合のある再現性のある打突』(いつも真砂先生が私たちにご指導いただいていること)が出来よう、私自身研鑽に励み修行を続けていきたいと思っています。

この度、ミラノで真砂先生に再会することができ、この上もない喜びを感じました。交剣知愛 AROUND THE WORLD 来年 皆さまとお会いするのを楽しみにしております。

